View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

氏名	STEFANIAK　ANNA
ヨミガナ	ステファニアク　アンナ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第579号
学位授与年月日	平成30年3月26日
学位論文等題目	〈論文〉　「静寂とミニマリスムの探求」
	〈作品〉　「Science as non-existence」　（「非存在としての静寂」）
	〈演奏〉

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	藤原　信幸
（論文第１副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	小松　佳代子
（作品第１副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	豊福　誠
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	三上　亮
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	

（論文内容の要旨）

序論では、本論文にて分析する事にした主題、研究分野、及び選択した様々な文化について説明する。本論文で考察するのは主に以下のような問いである。視聴的静寂は必要なのか？以前、同様の話題に触れた作家は存在するのか？もし存在するとしたら、彼らの動機やもたらした結果は何か？

さらに、過去の業績を概観し、この度取り組むことになった主題との関連性を調べる。

本論文の解説は３章で構成されている。最初に、自分にとって「静寂」と「ミニマリズム」はどういうものなのか、そして何故両者を繋げようと思ったかを解説していく。

第１章はミニマリズムに焦点をあてる。ミニマリズムという運動の歴史およびマニフェストをたどりながら、この思潮を創始した最も代表的な作家たちの姿勢を述べる。この思潮がアジア大陸まで影響を及ぼしたか、そしてアジアの諸文化にて、いかに表されたかを分析する。

次にはデザイナー、建築家、写真家、インスタレーション作家等を中心に、現在のミニマリスト作家たちの簡単な解説をする。続いて、ヨーロッパ、アメリカ、アジアのガラス作家のいくつかの作品を選択し、分析する。それぞれの共通点と相違点(話題の選択や用いられた技術など)を探し当て、その原因について考える。

また、生活習慣としてのミニマリズムについて簡潔に語る。その中に、日本で流行っている「3Rs+R」の規則(reduce, recycle, reuse and refuse)、地産地消の傾向、又、より極端な「100品」と言う生活スタイルの様な例を挙げられる。さらに、いつからこのような傾向が始まったか、そして、日本の禅をはじめとする昔からの思想や哲学との関連性があるか否かを調べる。

第２章は静寂について次のように順番に分析する:静寂の種類、形態、役割および可能な意味。同章の最後に様々な文化における、それぞれの静寂に関する解釈を分析する。特に日本の文化における静寂の重要性を重視して分析していく。

さらに視聴覚汚染問題と、それに特別に悩まされている住民の心身への影響に焦点をあてる。

次の節で音楽における静寂を分析する為に、ジョン・ケージ、フィリップ・グラス、武満徹といった作曲家が、どの様なインスピレーションや目的を持ってこの話題に対して臨んできたかについて語る。続いて、ヨーロッパ、アジア、アメリカの作家による詩や作文を分析して、文学における静寂について触れていきながら、ポーランドおよび日本の作家に焦点を当てる。いくつかの作品を選択したうえで、その中に静寂に関する引用、及び静寂の種類、意味、可能な解釈などを探しあてる。

また美術に於ける静寂について解説する。冒頭で写真、絵画、アートインスタレーションといった分野での役割について述べる。さらに、パントマイムや舞踏を始めとする舞台芸術における静寂について簡単に語る。

論文の主要分はガラスアートに関する静寂である。それぞれの文化背景を持つ様々なガラス作家を選択して、彼らが本主題にどの様な姿勢で臨んだかについて述べて、その共通点と相違点を探し当てていく。彼らがどのようなテーマを選んだか、どのような静寂の種類を表したか、作品自体の中の重要性などを細かく調べる。尚、彼らが選んだ素材、技術、色調、規模などのような表現手段をも分析していく。芸術(美術)に対する哲学及び宗教のあらゆる影響についても言及する。アートにおける静寂と哲学や宗教の基準との繋がりの有無を探っていく。この章の最後にいかに以上で分析した作品が自分の当主題への理解力に影響を及ぼしてきたか、そして自分の今後の作品にどの様に影響を及ぼしそうか、について述べる。

第３章は私の作品の解説且つ分析になる。最初に今まで作ってきた作品がどれくらい本論文のテーマに関係するか、分析する。それから、この話題を選ぶまでのインスピレーションと思考について述べる。過去の作品の背景にある主な考えや目標を解説して、作品の規模や形の選択について語る。

次のような順番にて、自分のオリジナル作品を解説していく。最初に各作品のテーマとその背景にあるインスピレーションについて説明する。そして、似たような話題に触れた事がある他人の作品に関して簡単に分析していく。最後に、自分の作品の主な想定や考え、目的について説明する。この区分はスケッチ、企画(棄却されたのも含めて)、模型、技術的な試験などを述べた後、実際に出来上がった作品に焦点を当てる。作品が最初の想定と一致しているか否か分析して、最終的な結果を確認する。さらに、いかに作品に対する知覚が展示の仕方や照明、環境によって影響されるかを研究する。鑑賞者の意見を集めて分析していく。この節の要約として、私の最終的思考と意見を述べる。

次に放棄した企画について解説する。なぜ企画を断念したかを簡単に説明する。

この節の末尾に今後の企画について語る。自分の作品の発展の行方について解説する。将来、どのような形、どのような話題に基づいて作品を作っていくか述べる。

論文の最終部分は主題の幅広さをもう一度主張しながら、これまで集めた情報を簡単に整理して紹介する。自分の作品と他人の作品の分析によって結論を出す。個々の鑑賞者による作品に対する個人的知覚の重要性、及び個人的な解釈の可能性を評価する。

さらに、序章で述べた想定と構想を再検討する。自分の過去の考え方を本論文での考察を通して得られた現在の意見と比較する。なお、冒頭で提示した疑問への回答も検討する。最終章で結論を述べ本論文のまとめを行う。

（論文審査結果の要旨）

本論文は、ポーランドからの留学生である申請者が、自らの文化と日本の文化との共通性と差異に着目しつつ、申請者自身のガラス作品制作の技法とコンセプトについて考察したものである。静寂というコンセプトとそれを表現する手段としてのミニマリスムという表現様式について、他の芸術家や他の芸術分野にまで視線を届かせ、広い視野から分析している。

第１章で問題意識を論じた後、第２章でミニマリスムについて論じている。ガラス作品に限らず、さまざまな芸術ジャンルの作品の分析を通して、ミニマリスム的表現によってもたらされる効果を考察することで、自らの表現方法を省察している。ヨーロッパ、アメリカ、日本の作家を取り上げているが、ミニマリスムの作品に関しては文化的背景による差異よりも共通点の方が顕著であることを見出して

いる。

一方、第３章で論じられる静寂に関しては文化的違いにむしろ着目している。静寂について、美術のみならず、日常生活における音や実験音楽、さらにはポーランドの詩を中心とした文学、あるいは俳句や歌詞にまで言及している点が本論文のオリジナリティであろう。惜しむらくは、多様なジャンルを考察したため、一つ一つの論点の深度が十分でないところである。

第４章では自己の作品コンセプトと制作プロセスについて、博士課程３年間の研究経過が示されている。特に博士審査作品に結実した「非存在としての静寂」は、人間に普遍的に訪れる死と、しかしそれが命のつながりへと展開することを表現するためにメビウスの輪というモチーフが設定されたことが説得的に論じられる。また、この作品は申請者が来日前に制作していた「水子」というモチーフと結びつき、死という普遍的な問題が、静寂というテーマで作品化されることで、同時に個人的なテーマとなることを論じており、申請者の制作研究のまとめとして、本論文の意義が示されている。

以上の点から、博士学位に値する水準に達していると判断した。

（作品審査結果の要旨）

ポーランドからの留学生であるステファニアク氏の博士学位論文では、「静寂とミニマリズムの探求」を題目に、ポーランドで育った筆者が日本での生活の中で、ヨーロッパと日本との文化的差異に気付き、そこから受けた感情の変化を「静寂」をテーマに、「ミニマリズム」の関係性について作品分析を踏まえ論じ、更に独自の論考へと発展させている。提出作品では、音の感覚を氏の専門領域であるガラス素材を用いて、形、色そして素材の持つ特性を生かした視覚的芸術表現へと転換していった。一端を示す物であり、今後の展開に期待したい。

提出作品は「コントラストによる静寂」と題した二つのシリーズの壁面作品と「非存在としての静寂」と題した立体作品からなり、どちらもガラスと異素材の金属を組み合わせた作品である。筆者の制作は、トピックごとに制作技法と表現が異なっており、技術の多彩ぶりと表現力の豊かさを示すものである。特に壁面作品の完成度は高く、日本的感性に根ざした「静寂」を表現した秀作といえよう。技術の高さと表現力は、博士学位に相当するものと判断した。

（総合審査結果の要旨）

申請者は、母国ポーランドにいながら、幼いころより日本のマンガやアニメを通し、日本文化に対し興味を持ち、それを深めていた。大学学部において、母国ポーランドでデザインをベースにガラス造形を学び、母国の文化と日本の文化の違いと類似性に着目し、博士後期課程のテーマ「静寂とミニマリズムの探求」を見出し、考察と制作を進めた。制作については、博士課程の１年目よりしっかりとした計画を元に実験的制作を行い、グループ展での発表を行うなど積極的に活動していた。技法に関しては、主にキルンワークの研究と、グラスファイバーの活用による試みが注目される。グラスファイバーを鋳型へ貼り付ける方法で、儚げで存在感の希薄な像の表現を実現するなど、古典的な技法に縛られずに柔軟な展開を見せていた。

先行研究として書籍、webの活用などによりポーランドや日本のガラス作家達を調査し、自身の求める世界を極めようとしてきたのと同時に、美術のみならず、音楽や詩などの文学、日本の俳句などからもインスピレーションを求めるなど、工房で手を動かす制作だけでないリサーチを効果的に行っている。

博士審査展で発表された作品は、一見単純な東西文化比較になりがちなテーマを、学部時代に作られた「水子」をテーマにした作品からの関連を感じさせる「非存在としての静寂」の一部として作られた「メビウスの輪」によって、それらとは違ったものとなったといえる。生命の循環に通じる作品表現と同時に、それらが論文において丁寧に考察され、個人的でありかつ普遍的なテーマとして、申請者の独自な世界を創造することに至っていると評価した。

申請者は、この審査展の発表において一人の表現者として、主題と作品を統合しひとつの区切りを付

けたといえるが、作品に関して言えば、自身が見出した新しい試みと言える技法に対しては、未だに完成に至っているとは言えず、更に完成度を上げて行くことを期待したい。